PART 1 全体の調査結果

第4章 子育て支援

邵　勤風

第1節 子どもの預け先

母親が仕事以外で家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）が「いる（ある）」と回答した母親の割合では、東京・北京・上海・台北は８割前後に対し、ソウルは６割である。また実際子どもの預け先について、５都市に共通しているのは身内に子どもを預ける割合が高いことである。

子どもの預け先の有無

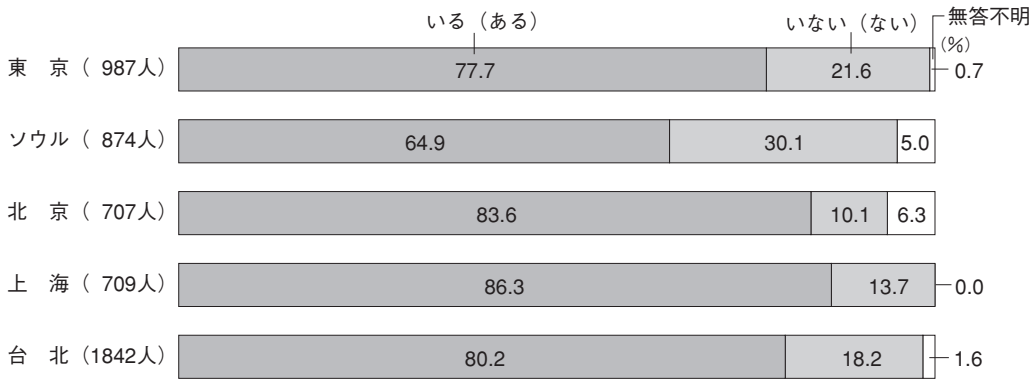
仕事以外で家を空けるとき、子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）がいる（ある）かをたずねてみた。母親の回答のみを抽出し､分析した結果は**図４－１－１**である。

子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）が「いる（ある）」と回答した母親の比率をみると、東京は77.7%であるのに対して、上海は86.3%、北京は83.6%、台北は80.2%、ソウルは64.9%である。5都市の中で、最も比率が高いのは上海である。

次に、母親の就業状況の違いによる差がみられるかどうかをみてみたい（**図４－１－２**）。北京と上海は７割の母親が常勤者で、パートタイムや専業主婦のサンプル数が少ないため、就業状況別で分析するにはあまり適切でないと考え、ここでは、北京と上海を除き、東京・ソウル・台北の３都市のみをとりあげる。この図から次の３つのことがわかる。

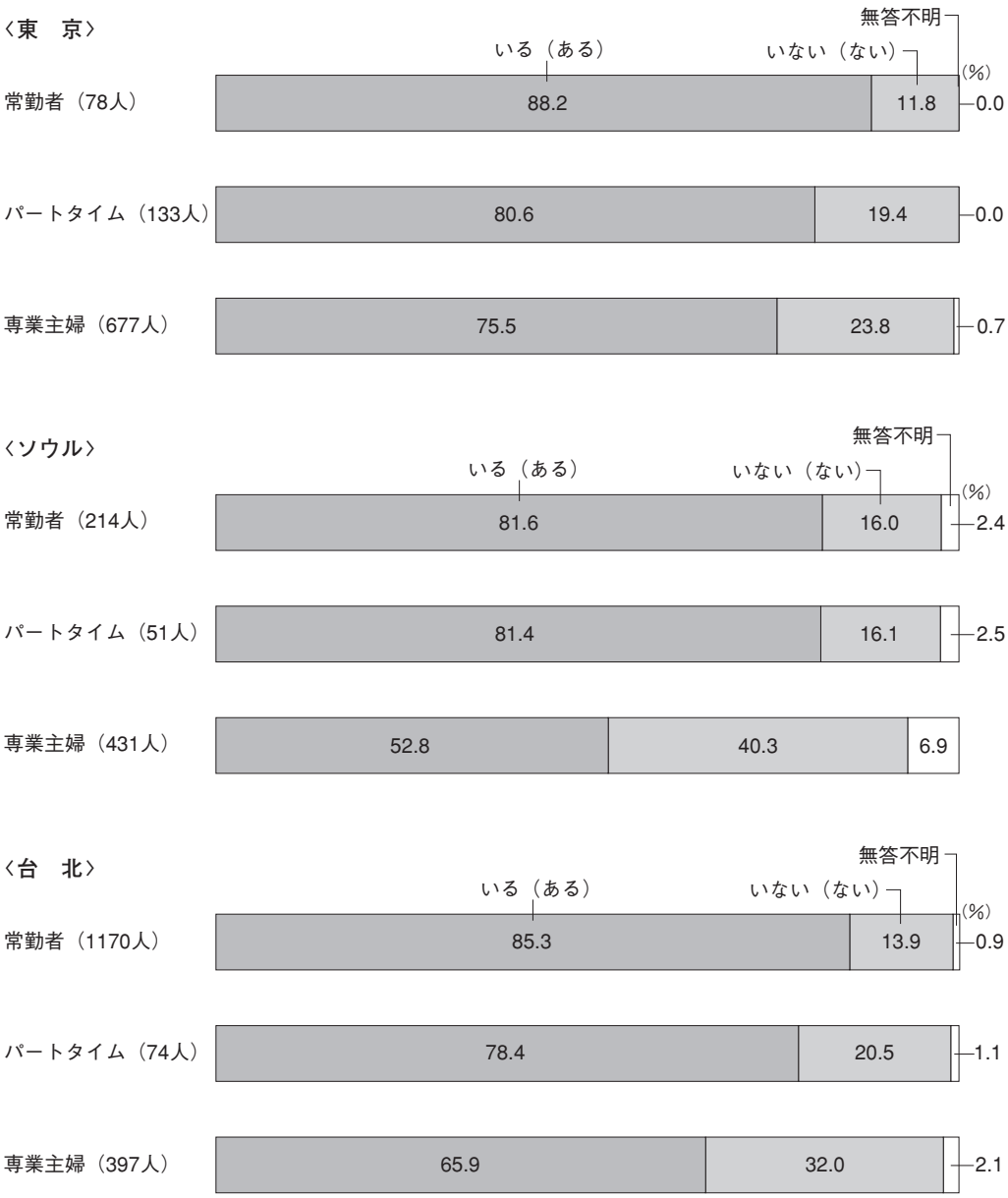
１つ目は、３都市とも、８割以上の常勤者が子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）が「いる（ある）」と回答したこと。２つ目は、専業主婦より働いている母親（「常勤者」「パートタイム」）のほうが子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）が「いる（ある）」と回答した比率が高いこと。３つ目は、常勤者と専業主婦が「いる（ある）」と回答した比率の差に注目すると、ソウルで常勤者と専業主婦との比率の差が28.8ポイントで、３都市の中で最も大きいことである（東京12.7ポイント差、台北19.4ポイント差）。

■図４－１－１　子どもの預け先



注）母親の回答のみ分析。

■図４－１－２　子どもの預け先（母親の就業状況別）



注１）母親の回答のみ分析。
注２）母親の就業状況について「フリー（在宅ワークを含む）」「産休、育休中や休職中」「その他」および無答不明の人は図から省略した。

子どもの面倒を見てくれる人（機関・サービス）

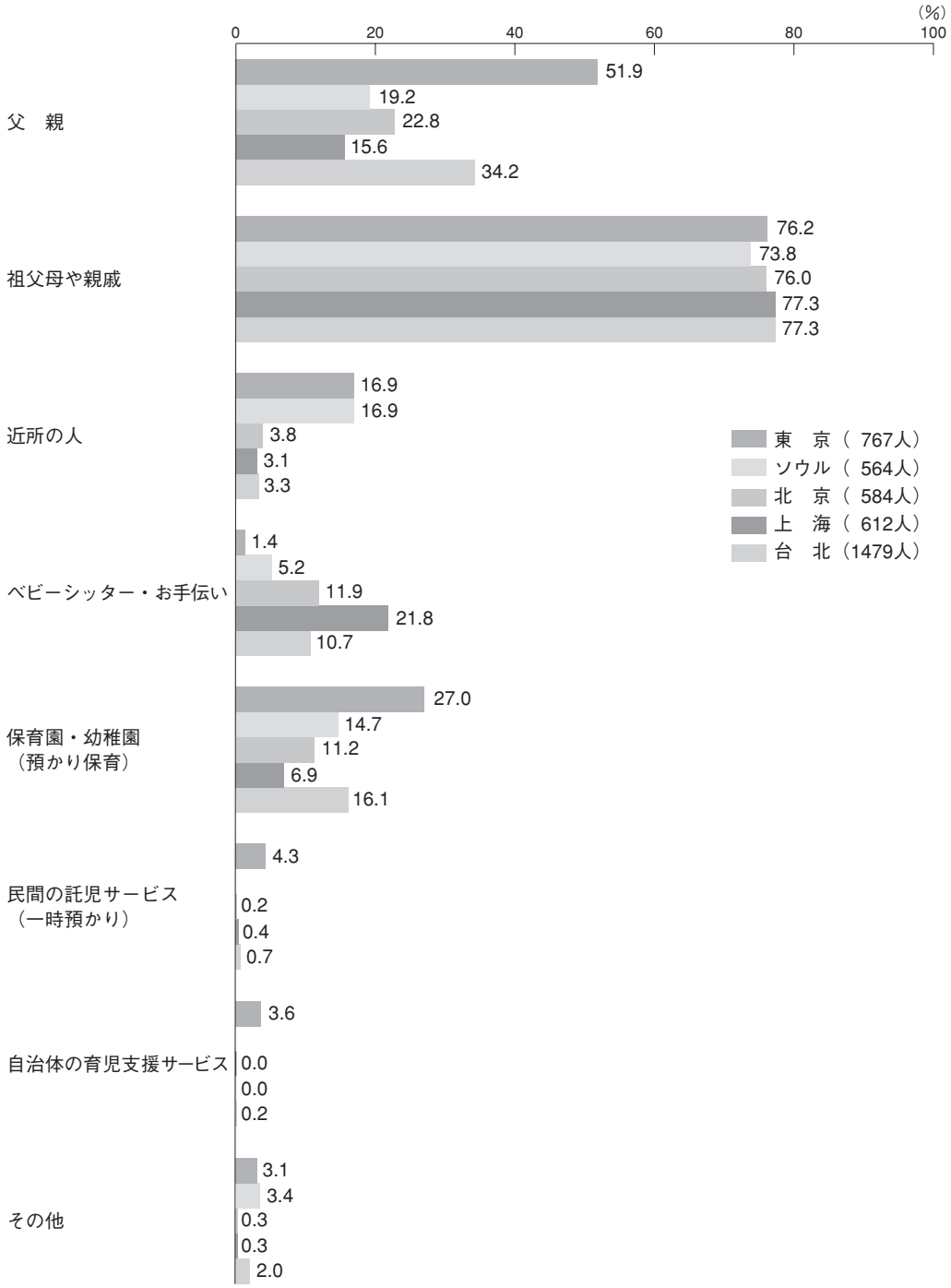
つづいて、実際どういう人（機関・サービス）に子どもを預けるのかについてみてみたい（**図4－1－3**）。

どの都市でも第1位に「祖父母や親戚」があがり、7割以上が選択している。また、「父親」の比率をみると、東京は51.9％で、「祖父母や親戚」に次ぐ第2位となっている。台北は東京ほどではないが、3割で、ソウル、北京、上海は1～2割の回答である。5都市を通じて、身内に子どもを預ける割合が高いという傾向がみられる。

では、東京の「父親」の比率が高いことをどのようにみればよいだろうか。第3章で述べたように、東京の父親はほかの都市の父親よりも、家事・育児にかかわっているとは言えないことから、父親が子育てに協力的で、子どもの面倒をよく見るというより、母親が家を空けるとき、子どもを預けられる先が限られているという見方や、東京はほかの都市ほど、夫婦で外出することが多くないためといった解釈もできる。

また、上海では、「ベビーシッター・お手伝い」と回答した比率が21.8％で、「父親」（15.6％）よりも高い。北京、台北の回答も1割であるのに対して、東京はわずか1.4％である。上海、北京、台北では東京より「ベビーシッター・お手伝い」を活用していることがわかる。

■図４－１－３　子どもを預ける相手



注１）複数回答。
注２）面倒を見てくれる人が「いる（ある）」と回答した母親のみ分析。
注３）「保育園・幼稚園（預かり保育）」について、ソウルでは「ノリバン・保育園」、北京、上海、台北では「幼稚園・託児所の一時託児」となっている。
注４）「民間の託児サービス（一時預かり）」「自治体の育児支援サービス」について、ソウルではたずねていない。

第2節 幼稚園・保育園への要望

いずれの都市でも多くの母親は園に対して、人とのかかわり方を教えてほしいと希望している。また、東京、ソウル、台北は就園状況別でみると、それぞれの特徴があることがわかる。

幼稚園・保育園への要望については、就園児の母親の回答のみを抽出し、分析してみよう（**図4－2－1**）。この図から以下の4つのことがわかる。

1つ目は、人とのかかわり方に関する要望がどの都市も高いことである。人とのかかわり方に関する項目については、「集団生活のルールを教えてほしい」が、東京とソウルでは8割（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」、以下同様）で、北京、上海、台北では9割である。「子どもに友だち付き合いが上手になるような働きかけをしてほしい」は、東京では8割弱で、それ以外の都市では9割を超えている。

2つ目は、東京では幼稚園・保育園に対して、人とのかかわり方に関する要望が強い一方、知的教育の面に関する要望がそれほど高くないことである。「知的教育を増やしてほしい」は4割で、「保育終了後、おけいこ事をやってほしい」は4割弱である。

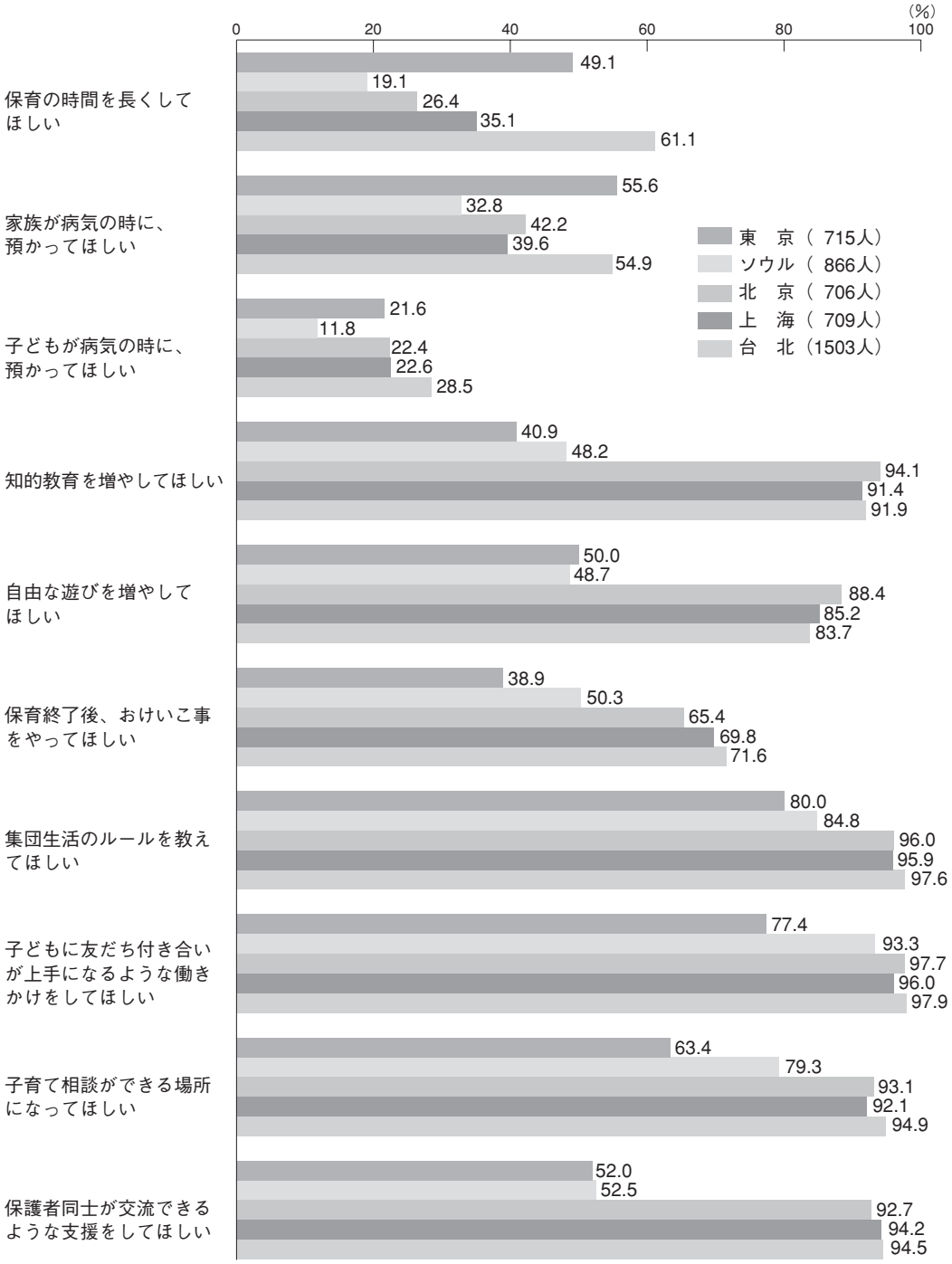
ほかの都市の特徴をみると、次の3つ目のことがわかる。北京、上海、台北では幼児園や幼稚園・託児所に対して、知的教育の面に関する要望が高いことである。9割の母親は「知的教育を増やしてほしい」と回答し、6～7割は「保育終了後、おけいこ事をやってほしい」と回答した。

4つ目は、ソウルでは幼稚園・保育施設に対して預け先としての機能に関する要望（「保育の時間を長くしてほしい」「家族が病気の時に、預かってほしい」「子どもが病気の時に、預かってほしい」）が低いことである。それ以外では東京と似ている傾向があるようである。

10項目を通してみると、台北はどの項目も回答比率が高いのが特徴である。北京と上海は幼児園の預け先としての機能に関する項目（「保育の時間を長くしてほしい」「家族が病気の時に、預かってほしい」「子どもが病気の時に、預かってほしい」）の比率が高くないが、それ以外の項目では、回答比率が高い。

幼稚園・保育園への要望について、回答比率が高いからといって、園側がニーズに応えていないとは限らない点に注意したい。母親のニーズに対応していても、園に対してもっとやってほしいと希望していることも考えられる。また、回答比率が低い場合も、2つの可能性が考えられる。1つ目は、現在園のほうで十分に対応しているため、要望が高くあらわれない可能性である。2つ目としては、都市により、制度や園の機能が異なるため、決められている以外のことを希望しても園には対応できないことが母親にわかっている可能性もある。

■図４－２－１　幼稚園・保育園（保育施設・幼児園・託児所）への要望



注１）「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%。
注２）就園児の母親の回答のみ分析。
注３）「知的教育を増やしてほしい」について、ソウルでは「認知学習を増やしてほしい」となっている。

就園状況別にみた各都市の特徴

つづいて、就園状況別に幼稚園・保育園への要望を分析してみたい。北京と上海の場合、日本のように、保護者の就業などの状況によって、子どもの就園状況に違いはなく、3歳以上の幼児は日本の幼稚園と保育園のそれぞれの特徴をあわせ持っている幼児園のみに通っているため、ここでは、就園状況別の分析から除外する。日本の就学前の幼児教育制度に比較的に似ているソウルと台北を取り上げて、就園状況別に幼稚園・保育園（保育施設・託児所）への要望を分析する（**図4－2－2**）。この結果、都市によって、いくつかの特徴がみられた。

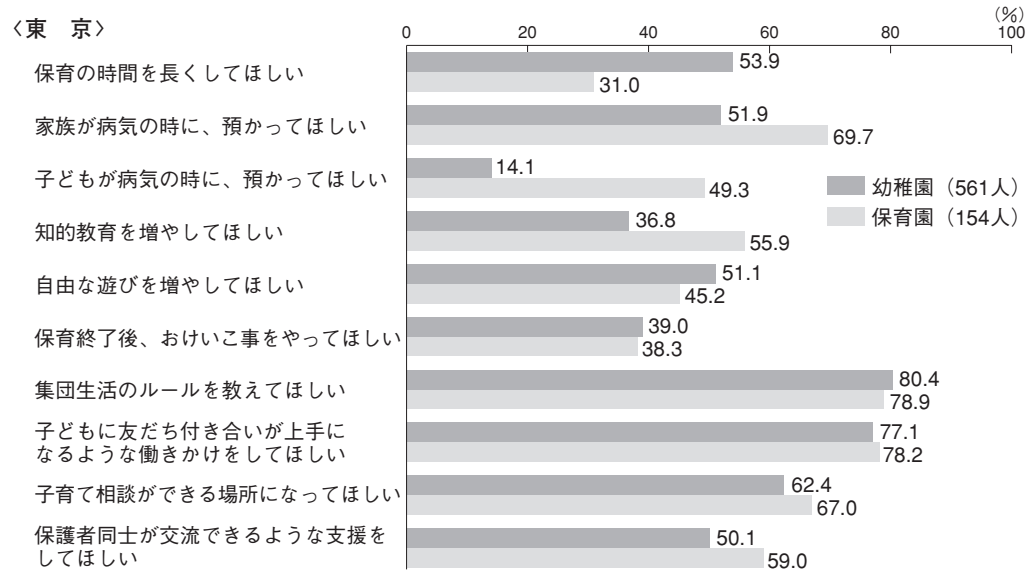
東京の特徴は、ソウル、台北より就園状況の違いによる差が大きいことがあげられる。幼稚園と保育園とで比率の差が大きかった項目をあげると、「子どもが病気の時に、預かってほしい」で、35.2ポイント差（幼稚園14.1%＜保育園49.3%）、「保育の時間を長くしてほしい」で、22.9ポイント差（幼稚園53.9%＞保育園31.0%）、「知的教育を増やしてほしい」で、19.1ポイント差（幼稚園36.8%＜保育園55.9%）、「家族が病気の時に、預かってほしい」で、17.8ポイントの差（幼稚園51.9%＜保育園69.7%）である。

ソウルの特徴は、ほとんどの項目では、保育施設より幼稚園への要望が高いことである。「子どもが病気の時に、預かってほしい」（幼稚園9.0%＜保育施設13.6%）、「保護者同士が交流できるような支援をしてほしい」（幼稚園50.6%＜保育施設54.0%）の2項目が幼稚園より保育施設への要望が若干高い。

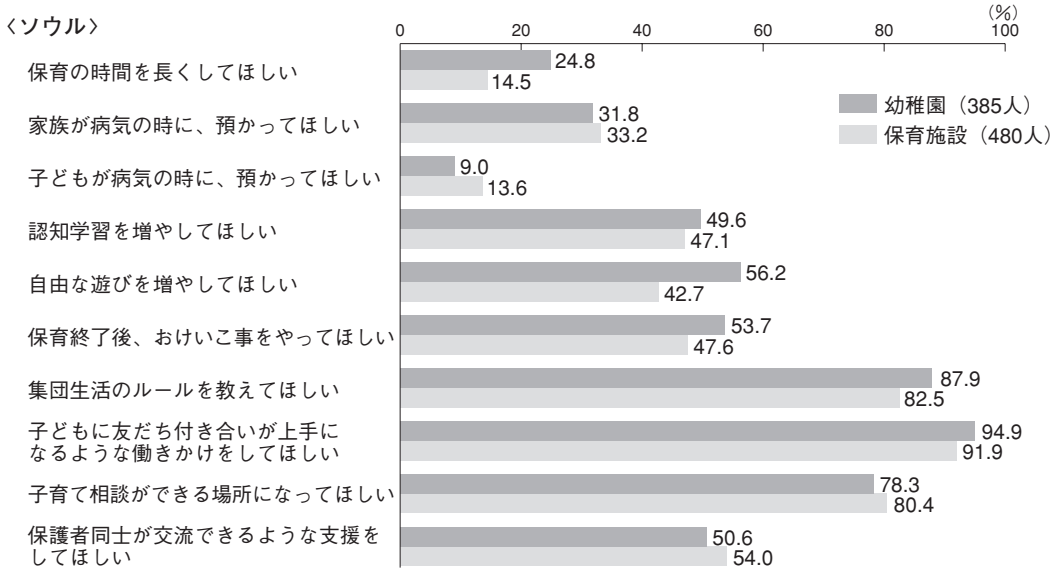
台北の特徴は、就園状況の違いによる差がほとんどみられないことである。「家族が病気の時に、預かってほしい」（幼稚園53.4%＜託児所61.0%）、「子どもが病気の時に、預かってほしい」（幼稚園27.0%＜託児所34.8%）の2項目のみ、託児所への要望が幼稚園への要望より若干高い程度である。

上記のような就園状況別にみた各都市の特徴はそれぞれの都市の就学前の幼児教育制度が担う役割の相違によるものが大きいのではないかと思われる。

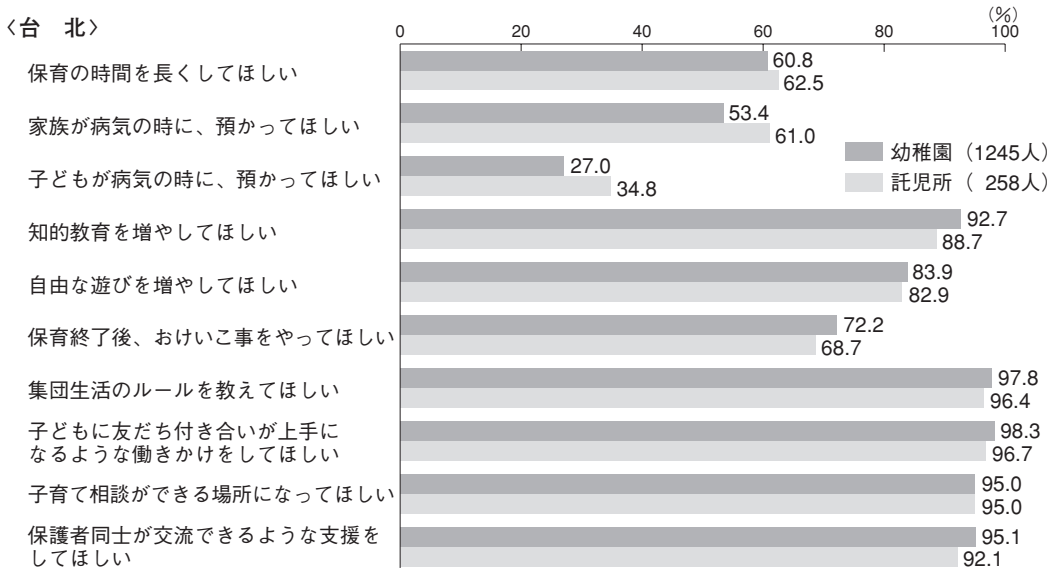
■図4－2－2　幼稚園・保育園（保育施設・託児所）への要望（就園状況別）



〈ソウル〉



〈台　北〉



注1）「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の%。
注2）就園児の母親の回答のみ分析。
注3）「知的教育を増やしてほしい」について、ソウルでは「認知学習を増やしてほしい」となっている。